附雛遊

雛遊ハ、ヒヒナアソビト云フ、往昔ハ、平生ニ之ヲ行ヒシガ、後ニハ三月三日ヲ期シテ之ヲ爲セリ、ヒヒナハ、原ト兒女ガ平日弄ブ所ノ小偶人ニシテ、略シテヒナト云ヒ、雛ノ字ヲ用ヰル、其雛ニハ土偶アリ、紙製アリテ一ナラズ、其附屬品モ亦甚ダ多シ、德川幕府ノ時、盛ニ華美ヲ競フヲ以テ、幕府屢之ガ制限ヲ立テタリ、

〔書言字考節用集二時候〕雛遊（ヒナアソビ）上古年始、於二宮中一有二此遊一、上宮太子以來、期二上巳一爲二女兒之戲一、

〔和字正濫要略〕ひゝなあそび　此假名いまだたしかなる證を見ず、又眞名はましてゑらず、齋宮女御集に、うちにおはせし時、ひゝなあそびに云々、又おなじひな社の前の河に、紅葉ちる處にて云々、又中務集に、中宮のひゝなあはせに、かはらのかたすはまにつくれり、ひゝなのくるまのなぬか、たなばたもけふはあふせと聞く物をかはとばかりや見て歸りなん、又云、れいけいでんの女御、中宮にたてまつれ給ふ、ひゝなのもに、あしでにて、ゑら浪にそひてぞ秋は立ちぬらしみぎはの蘆もそよといはなん、俗本の假名は證と云がたけれど、これら一同に皆ひゝなとかき、又ひなともあれば是を引、俗書にひいなと書、眞名は雛の字を書けり、鼠負の音は、ひきなるを、音便にひいきといふごとく、ひなの音便も、ひいなといへるかと思へるにや、假名にはさることなし、鳥のひなをいふ時、ひゝなといへることは見及ばねど、ひゝと聞えてなく物なれば、ひゝなきを略して、ひゝなといひて、それを猶略して、ひなといふにや、ひゝなをも、俗にはひなとのみいひ、齋宮女御集に、ひなやしろとあれば、互にひゝなとも、ひなともいふべきにや、鳥のひなは、ちひさういたいけゑたれば、裝束のかたなどをも、ひながたと云、これを思へば、ひゝなも、屋形人形よりよろづちひさういつくしきを、ひなにたとへて名づけたるにこそ、

〔玉勝間十〕ひゐな　人の形をちひさく作りて、わらはのもてあそぶ物を、物語ぶみどもに、ひゐな

名稱